

第7章 宗教

第1節 宗教・民俗信仰

まちの発展とともに変貌する宗教

明治期、住み慣れた土地を離れ北海道に渡った人々が、人知の及ばない荒々しい自然のなかで無病息災を願い、郷里由来の神仏や地神を祀り、崇敬の念を強めるのは当然の心情であろう。同時にそれら神仏の存在は、先祖や郷里を偲ぶよすがにもなったはずである。そのため、人々は厳しい暮らしのなかでも石碑や小祠、小堂を設置することに労を惜しまなかった。

しかし、時代が大正、昭和へと移り変わるにしたがい、農村を取り巻く状況は大きく変わっていく。とりわけ高度経済成長期以降は産業や社会の構造が大きく変化した結果、都市への一極集中が進み、農村地域の人口は減少の一途をたどった。こうした状況のなかで、共同体を基盤とする宗教の様相も変わらざるを得なくなったのである。本章では、1970（昭和45）年以降の各寺社仏閣等の歴史を記す。

なお、各神社のデータについては、主に『北海道神社庁誌』（北海道神社庁）を参照した。

(1) 神社

当別神社（元町51番地12）

1970年以降の変遷

当別神社の創建（当初は阿蘇神社と称した）は、伊達邦直主従の北海道移住と期を同じくするため、その境内は町民にとっては歴史に触れる場であり、心のよりどころとして、いまでも長く愛されている。

1967（昭和42）年に社名を「当別神社」へと改称。「当別町開基100年」を翌年に控えた1969（昭和44）年8月には、岩出山より一部用材の寄進

を受けるとともに、同町より杉材を購入して、1920（大正9）年以來となる新たな社殿を造営した。1980（昭和55）年8月社殿改築。1996（平成8）年、伊達邦直奉斎100年を記念して大祭が斎行され、敷地内に「御創祀壱百年記念碑」を建立した。

2006（平成18）年には、奉斎110年を記念して社務所を改築した。また同年、当別神社氏子の婦人会員153名で敬神婦人会が設立された。

2015（平成27）年には、奉斎120年記念事業として、手水舎の改修、神社のぼりと灯籠上部の取り換え、ならびに社殿内調度品を新調した。

敷地内には、「忠魂碑」「戦没者氏名碑」（昭和49年建立）などがあり、明治、大正、戦前に建てられた石碑などとともに、町の歴史が刻まれている。



写真1 当別神社（本殿）



写真2 当別神社（全景）

活動と役割

当別神社は現在、総鎮守として町内の各神社を管理し、取りまとめる役割を担っている。

これまで合祀（配祀）された神社は、中央神社（六軒町）、青山神社及び茂平沢神社の三社（別項「1970年以降に廃社となった神社」を参照）。

そのほかに境内外摂末社として聖徳神社（祭神・聖徳太子）があり、社前に小ぶりの鳥居が置かれている。この聖徳神社は、1952（昭和27）年4月3日に町内の大工職人の組合によって祀られたもので、神社本庁に当別神社内の建立申請を得て許可されたものである。

当別神社例大祭「当別まつり」は、8月15日の例祭日の前後3日間に開催され、町



写真3 当別神社内聖徳神社

民にとって欠かせない年中行事となっている。

例大祭の重要神事である神輿渡御を担っているのは、1988（昭和63）年に設立された当別神社の神輿会「伊邦会」である。1991（平成3）年には心の故郷^{ふるさと}岩出山町より招請を受け、伊達政宗入府400年および有備館開学300年を記念して、神輿の神事が執り行われた。

この時の様子を、当時^{ねぎ}禰宜として参加した後藤正洋氏（のちに宮司就任、現当別町長）は、「沿道に寸分の隙間もないくらい人が出ておられて迎えていただいた。みなさん手を合わせてお参りをされて涙を流して喜んでおられました。本当に感動しました」と語っている。この交流がきっかけとなり、2000（平成12）年に岩出山町との姉妹都市盟約が締結され、2013（平成25）年にも現地での神輿渡御が行われた。さらに他市町村の神社の例大祭等でも神輿を巡行し、地域を超えた交流も活発に行っている。

神社本庁包括神社（北海道神社庁札幌支部管内）

例祭日 8月15日

旧社格 村社

祭神 伊達邦直命

社殿様式 神明造、社殿面積43.4坪、境内面積2779坪

名誉宮司 後藤正義 宮司 後藤尚範（2021年7月1日就任）

歴代祀職 榊永直 岡村静雄 後藤玄良 佐藤桂 後藤美光 後藤正義 後藤正洋

社宝等 開拓の図（複製を当別伊達記念館に展示）

年行事 1月1日歳旦祭、2月3日節分祭、2月11日紀元祭、3月21日祈年祭、6月30日大祓 8月15日例大祭、11月23日新嘗祭、12月31日大祓・除夜祭

弁華別榎原神社（弁華別435番地2）

弁華別神社創建のきっかけは、福岡県から入植団を率いた柴藤善三郎を追慕し、建立した碑の前で祭典を行ったのが始まりである。その後、1905（明治38）年に碑のそばに榎原神社の遥拝所を建立。1910（明治43）年に拝殿を新築し、弁華別榎原神社と称した。

近年では1979（昭和54）年に日赤弁華別婦人部有志により、鳥居両側に花壇を造成。1981（昭和56）年には、弁華別開基百年祭の記念事業と

して、社殿屋根トタンの葺き替え、鯉木の交換、玉垣、戸窓のアルミサッシの取り換えが行われている。また翌年には「弁華別開基百年碑」が敷地内に建立された。

後述のように、合祀された神社に弁華別伊夜日子神社と須佐神社がある。

また境内周辺はエゾエンゴサクの群生が見られ、毎年春には青い花が咲き誇ることから、近年では隠れた写真スポットにもなっている。

神社本庁包括神社

例祭日 9月4日

祭神 神武天皇、ひめたたらいすずひめのみこと媛蹈鞬五十鈴媛命

社殿様式 神明造、社殿面積13坪、境内面積1050坪



写真4 弁華別樞原神社

中小屋神社（中小屋4788番地）

中小屋神社は、開拓者が移住地にそれぞれ祀っていた三社（大国主命二社、八幡大神一社）と集落神社の中小屋神社（大国主命と応神天皇）を統合し、1921（大正10）年に一社としたものである。

1985（昭和60）年に中小屋地区開基百年記念事業奉賛会を結成し、1800万円を募財して現社殿を造営した。この際に灯籠2基が設置され、1884（明治17）年に建立された「当別元祖開田記念碑」が改修され台座が作られている。

神社本庁包括神社

例祭日 9月8日

祭神 大國主神、応神天皇



写真5 中小屋神社

金澤神社（金沢187番地）

創設年は定かではないが、1899（明治32）年に金沢小学校（当時当別小学校第三分教場）の校舎が新設され、そのすぐ後と伝えられている。1990（平成2）年には開基100年を記念し社殿を造営、1992（平成4）年



写真6 金澤神社

には灯籠が建立されている。

神社本庁包括外神社

例祭日 春4月15日 秋9月15日

祭神 神武天皇、応神天皇

東裏神社（東裏2554番地）

創建は1895（明治28）年6月、東裏32線北6番地に小祠を造営し、東裏殖民神社と称したことに始まる。1916（大正5）

年に東裏神社と改称し、1956（昭和31）年に現在地に社殿を新築し移転した。

1970（昭和45）年11月26日に法人格を取得。1979（昭和54）年、敷地内に東裏地域会館が建設されたことにより駐車場設置の必要性が高まり、加えて社殿の老朽化問題もあり、91戸より2400万円を募金し、建設委員会が発足。翌年9月には社殿の改築が終了し、「東裏神社竣成奉祝式典」が執り行われた。



写真7 東裏神社

1970年に「開町百年記念」碑、1984（昭和59）年に「東裏開基百年記念之碑」、1994（平成6）年には「御鎮座百年」碑が建立された。

なお、東裏南部にあった「相馬妙見神社」（明治34年創建）を1967（昭和42）年に合祀している。

神社本庁包括神社

例祭日 9月7日

祭神 神武天皇

対雁通相馬神社（対雁38番地）

1909（明治42）年に地域の青年会の提唱より、^{あめのみなかぬしのおおかみ}天之御中主大神を奉斎し対雁通相馬神社を創建した。相馬神社は道内各地に見られ、「馬、あるいは馬を中心とする家畜の守護を記念して福島県相馬地方の妙見三社に由来する」（『北海道の相馬神社 北海道の神社の人類学的研究（二）』）ことから、農耕に不可欠な馬への畏敬が奉斎に結びついたとみられる。

神社本庁包括神社

例祭日 9月12日

祭神 天之御中主大神

社殿様式 流造

川下神社（川下755番地2）

川下神社は1899（明治32）年の創建。
札幌・豊平水天宮（現在の札幌水天宮）
から分霊を奉斎したことから、当初は川
下水天宮神社と呼ばれていた。創建当時は川下左岸南5号線沿いの北側
の旧古川の川岸にあったが、1930（昭和5）年に現在地に移設。

1984（昭和59）年には川下開基百年記念事業の一環として、老朽化
した社殿の改修計画が持ち上がったが、「盛り上がる百年記念の熱気か
ら『改修より新築』を望む声が高まり」（『川郷 川下開基百年記念誌』）、
建設費650万円をかけて1985（昭和60）年8月30日に新社殿が完成、9月
10日に正遷座祭が執り行われた。社号碑、狛犬、灯籠なども整備され、
「開基百年記念碑」（昭和61年建立）も建
立された。

さらに神社名を「川下神社」と正式に
改称し、川下左右両集落の氏子らによっ
て維持管理されている。

神社本庁包括外神社

例祭日 春4月11日 秋9月17日

祭神 天照大神、水天宮神



写真8 対雁通相馬神社



写真9 川下神社

西当別神社（当別太612番地）

太美地区は明治中期に福岡県豊前団体が入植し、当別太に宇佐八幡
の分霊が祀られ、美登江には出雲大社の分霊が祀られた。1902（明治
35）年にこれらを合祀することになり、太美神社と称して、元太美小学
校の東隣（当時15線4号）に社殿を造営。1909（明治42）年11月に神社
名を「西当別神社」と変更し、1937（昭和12）年10月に現在の場所に
社殿を新築移転した。

1973（昭和48）年に原野1万310㎡を売却し、現在の社殿および社務



写真10 西当別神社

*1 長谷部栄次郎の碑については、第4章第4節を参照

なお境内には第3代宮司であり歌人として活躍した長谷部栄二郎（虎杖子）の句碑や顕彰碑もあり、この碑も氏子らによって近年改修され保存されている*1。さらに「西当別神社の由来碑」（昭和47年建立）、句碑（平成17年改修）などが多数あることから、氏子らが石碑などを献納し、環境整備を続けてきたことがわかる。時代の変化とともにまちの形が変わり、廃社となる寺社も少なくないなか、いまなお住民の心のよりどころとして大切に管理されている。

神社本庁包括神社

例祭日 9月9日

旧社格 村社

祭神 天照大神、豊受大神、八幡大神、沼河姫神、大國主神

社殿様式 神明造、社殿面積26坪、境内面積1988坪

高岡神社（高岡2046番地2）

高岡神社は高岡稲荷神社を嚆矢とする。創立年は諸説あったが、近



写真11 高岡神社

年、社殿造営時に書かれたと思われる木板の存在が明らかとなり、1883（明治16）年とほぼ断定された。その後、1921（大正10）年に高岡地区内の5体の地神を集結し、「高岡神社」と改称し、現在に至る。

1970（昭和45）年に社殿屋根修理・内装の修理が行われ、翌1971（昭和46）年には高岡神社百年祭を開催し、氏子ら

によって稲荷神像一対、百年記念碑、提灯一対、幟竿4本、幣殿御簾が献納されている。その後もたびたび幟や竿、三宝、しめ縄などの寄進が続いていることから、開拓当初から続く地元の氏神として大切に守られていることがわかる。近年では、狛狐（昭和46年建立、昭和55年台座設置）、「高岡神社百年記念碑」（昭和46年）、「開基百年記念碑」（昭和55年）が建立されている。

神社本庁包括外神社

例祭日 9月23日

祭神 倉稻魂神

獅子内神社（獅子内6429番地）

獅子内神社は、「平和農場」が祀った平安神宮の分霊と、「京佐賀農場」が祀った天照大神宮を1920（大正9）年に合祀したのが始まりである。1926（大正15）年に現在地に社殿が造営された。

『開拓90年の歩み 獅子内』には「昭和40年以降も改築、改装が続けられており」とある。

1992（平成4）年、開拓百年記念事業の一環として、事業費およそ1800万円を費やして改修を行い、9月8日に還座祭を斎行。同月13日には開拓百年奉告齋を行った。近年では、「開田記念碑」が1968（昭和43）年に建立、「獅子内開拓記念碑」が1982（昭和57）年に建立されている。

神社本庁包括外神社

例祭日 4月14日、9月9日

祭神 桓武天皇、天照大神



写真12 獅子内神社

材木澤神社（材木沢3252番地4）

材木澤神社は、徳島県阿波国体11戸が入植の折に祀った地神五柱の祭神と、小樽から移住した新潟県人田辺寅吉によって祀られた稲荷大神が合祀されたもので、1902（明治35）年に現在地に社殿を造営し、材木澤神社と称することになったものである。

現在の社殿は、1973（昭和48）年に、山林4万9586㎡を700万円で売

却し、9月30日にブロック積み神明造りとして再建されたものである。この時に売却された山林の由来と思われる記述が、『材木沢開基百十年記念誌』にあり、「1924（大正13）年、上当別奥に山林5町歩を氏子の寄付により購入し、神社の基本財産とし、翌年部落総出にて落葉松5000本を植樹した」とある。



写真13 材木澤神社

1990（平成2）年には、開基110年を記念して「材木沢開基百拾年之碑」と石灯籠が建立されている。社殿裏手の地神碑（明治22年建立）にはいまでも供物がそなえられている。

神社本庁包括神社

例祭日 9月8日

祭神 天照大御神

1970年以降に廃社となった神社

茂平沢神社（茂平沢3062番地）

1912（大正元）年に弁華別檀原神社より分霊し、現在地に「檀原神社」として奉祀したのが始まりである。1974（昭和49）年に「みどり野団地」造成に伴い、社殿を新築して「茂平沢神社」と改称した。その後、社殿の老朽化と氏子数の減少などの理由から、2020（令和2）年に当別神社との合祀が決定し8月に合祀祭を行い、社殿を取り壊した。敷地内の石碑などは祭祀跡として残している。合祀による登記完了及び解散は同年10月21日である。

参道に社号標、境内には手水鉢、「鈴木茂平之碑」（茂平沢の名の由来となった人物）、「開拓記念碑」（昭和44年建立）、灯籠、地神碑などが残されており、茂平沢に田圃を開いた人々の歴史が垣間見られる。

青山中央神社、古峯神社、四番川神社、青山神社（青山地区）

青山地区は、当別ダムが建設されるまで四つの神社があった。青山中央神社（青山中央）、青山神社（字青山）、古峯神社（青山奥二番川）、四番川神社（青山奥四番川）である。4社建立の経緯は、『当別町史』に詳しい。

当別ダムの実施計画調査が始まったのが、1980（昭和55）年のこと

である。その後、道民の森の造成も開始され、住民の移住などとともに宗教施設の対応が迫られるなか、地域で唯一の寺院である皆得寺は当別東町へ移転し、青山神社は当別神社に合祀された。

古峯神社、四番川神社についての廃社までの経緯は不明だが、青山中央神社については、『ふるさと 青山中央自治会解散記念誌』に多少の経緯が記されている。他の2社も規模は違うものの、同様の対応を行ったと思われるため、参考となるため下記に引用する。

自治会の財産として受け継がれてきた神社関係については、青山中央神社補償交渉委員会（委員長 泉正光氏他12名）を以って協議を重ねた。ダム補償用地以外は、個人売却とした。社殿については将来を勘案、解体し跡地に「鎮魂碑」を建立、この碑にご神体を遷座した。「馬頭観世音」の碑は従来の「野村五右衛門開拓の碑」と「忠魂碑」傍に移設した。「鎮魂碑」と「故郷碑」を敷地中央に配置して、ふるさとの歴史に触れる、郷愁の丘として集約整備された。

中央神社（六軒町）

『百年の歩み 中央部落史』によれば、1953（昭和28年）6月に、六軒町にあった帝国製麻の敷地内に祀られていた水天宮と小六農場に祀られていた稻荷神社（小六神社）が合祀されたのが始まりである。以降、中央部落の守護神として祀られてきたが、拝殿の老朽化や市街化などの理由から、1976（昭和51）年10月に当別神社の本殿の横に配祀された。現在、跡地には、「中央部落開基100年記念碑」、狛犬、手水などが残されている。また配祀以後は、当別神社例大祭の神輿渡御の折に中央神社のあった六軒町を巡行することが慣例となっている。

弁華別伊夜日子神社（弁華別）

1936（昭和11）年に新潟県人樺沢亀蔵によって奉斎されたことに始まる。天照大神、伊夜日子の神、稻荷明神を祀り、長く地元の信仰の場となっていたが、経年し、地域状況の変化などから、弁華別神社に合祀された。時期は不明である。

須佐神社（弁華別）

須佐神社は、1887（明治20）年に移民竹内孫一が発起人となり「素戔鳴尊^{すさのおのみこと}」を祀ったのが始まりで、1919（大正8）年には当別土功組合の申し入れにより水天宮を合祀している。

以降、神社は当別土功組合（当時）が管理しており、近年まで地元の有志らが管理を続けていたが、2014（平成26）年10月に弁華別神社に合祀された。

現在、当別土地改良区内には水天宮が祀られていることから、弁華別神社に合祀されたのは、素戔鳴尊のみではないかと思われる。

龍神社（弁華別）

1903（明治36）年7月の干ばつをきっかけに信州戸隠神社の九頭竜権現を奉斎し雨乞いの祭を行ったことに始まる。当別神社の元宮司後藤正洋町長によれば、後年、奈井江町に住む富樫某氏が祠を守っており、当別神社の宮司が毎年7月頃に現地で祈禱^{きとう}を行っていた。1980（昭和55）年～1985（昭和60）年くらいの間に富樫氏の申し出により、当別神社境内の社殿裏に「大山祇神」の石碑を建立し、龍神社の歴史は閉じた。

（2）仏教寺院

勝圓寺（北栄町34番地4）

浄土真宗本願寺派の寺院である勝圓寺は、1899（明治32）年7月に新潟県勝圓寺副住職上山慈眼が当別に入村し、仮説教所を開所したのが始まりである。1902（明治35）年6月に本寺を創立した。

1974（昭和49）年には新納骨堂建設が始まった。1976（昭和51）年に本堂改修、1986（昭和61）年9月には鐘樓堂を新築した。1991（平成

3）年10月に庫裡・会館の新築工事が終わり、落慶慶讃法要を執り行った。また2004（平成16）年3月には勝圓寺寺号公称百年記念記念事業の一環として、記念誌を発刊している。

寺院の運営は1975年ころまでは総代会を中心として活動していたが、昭和60年代以降は管理運営会を結成し、護寺運



写真14 勝圓寺

営に当たっている。創立から120年を超えた現在、信徒数は400名を超え、婦人会を中心にさまざまな活動を行っている。

歴代住職 初代・上山慈眼、二代・上山任介、三代・上山智亮、四代・上山知現

日顕寺（北栄町65番地）

1902（明治35）年、弁華別2番地に日蓮宗妙万寺派説教所として創建されたのが始まりである。1918（大正7）年7月17日、現在地に日蓮宗当別説教所として堂宇を建立。1953（昭和28）年9月30日に日蓮宗龍王山日顕寺と寺号公称し、現在に至る。



写真15 日顕寺

1981（昭和56）年10月20日、宗祖日蓮大聖人700遠忌御報恩御会式法要、2002（平成14）年に立教開宗750年慶讃法要、2021（令和3）年2月16日、宗祖日蓮大聖人御降誕800年記念法要が執り行われている。

本堂および施設の変遷については、1974（昭和49）年、老朽化により本堂を新築（80坪）。1975（昭和50）年に庫裡を新築し、2002（平成14）年には増築も行った。2006（平成18）年には老朽化により本堂休憩所を新築、2013（平成25）年に境内、墓地を整備した。

2021年には日蓮上人御降誕800年を記念し、北一タカハシ建設・高橋一彦氏の寄進により山門の建立、さらに佐藤萬香園・佐藤咲江氏の寄進で日本庭園222坪を造園（翌年10月完成）した。

現在、日蓮宗災害時協力寺院に登録し、防災アプリと提携し、災害時には避難所として提供している。

歴代上人 第一世龍玉院日顕・獅子原善量、第二世龍山院日法・獅子原善栄、第三世龍樹院日現・獅子原義顕、第四世龍光院日義・獅子原光顕

文教寺（北栄町39番地6）

石狩で土木請負業を営んでいた稗貫文



写真16 文教寺

十郎・まり夫妻が1924（大正13）年成田山不動尊の分霊を自宅に祀っていたことに始まる。1930（昭和5）年に、まり夫人が出家得度し隆円と改名し、翌年、真言宗智山派管長より「成田山 文教寺」と命名を受け、大本山成田山新勝寺の末寺となった。

その後、当別地区に一寺建立を発願し、私財を投じて文教寺を建立した。

歴代住職 初代・白石照隆、二代・稗貫照澄、現住職・谷照幸

大成寺（元町103番地）

大成寺は当別町最初の仏教寺院として設立された。創立は1878（明治11）年に札幌東本願寺別院に説教所設置の出願をしたことに始まる。



写真17 大成寺

この時は門信徒が少ないという理由で不許可になったが、1887（明治20）年に改めて近藤角太郎らが六軒町に仮説教場を新設したことから、札幌東本願寺別院から曾我善秀が派遣され、布教活動が始まった。1897（明治30）年12月10日に「大成寺」と寺号公称した。その後、1911（明治44）年に現在地へ移転した。

1950（昭和25）年から仏教青年会が結成され、1962（昭和37）年以降は青

年会を中心に同朋会運動が始まった。同朋会運動とは、宗祖親鸞聖人の700回御遠忌を機に発足した宗門を挙げた取り組みである。大成寺でも「各種の研修、奉仕活動、機関誌の発行、敬老会、その他レク活動など幅広く展開」している（『百年の歩み 中央部落史』）。寺院施設は1972（昭和47）年に納骨堂が完成、1976（昭和51）年11月に会館および庫裡が新築した。

歴代住職 初代・多田実円、二代・武田寂栄、三代・武田香龍、四代・武田昭龍、五代・武田龍太郎

観蓮寺（中小屋183番地1）

観蓮寺は、1896（明治29）年に富山県人桑谷観蓮が説教所を開設したことに始まる。1929（昭和4）年に中小屋1845番地2の場所から現在

地に移転し、本堂・庫裡改築を行った。

1973（昭和48）年に本堂（165㎡）新築、1975（昭和50）年に納骨堂（29.7㎡）、さらに1976（昭和51）年6月に観蓮寺会館新築（28.7㎡）および庫裡改修工事が行われている。なお檀家の寄進により、1973年8月本尊宮殿、須弥壇収納整備、1990（平成2）年9月に折障子並びに余間欄間取り付け、2000（平成12）年9月菱灯籠設置、2012（平



写真18 観蓮寺

成24）年9月に御内陣彫刻、仏具の金具修理や漆塗など装飾部分の修復が行われている。

2000年9月11日に観蓮寺創立100年記念慶讃法要、2016（平成28）年9月11日には観蓮寺宗祖親鸞聖人七百五十回御恩忌法要が執り行われた。

定例行事は3月20日春季彼岸会、4月1・2日永代経法要、5・6・7・10月定例法話会、8月お盆会、9月10・11日宗祖親鸞聖人報恩講、9月23日秋季彼岸会。

歴代住職 開基住職・桑谷観蓮、二世・殿村覚信、三世・大河合徳順、四世・河合徳祐、五世・河合祥淳

全久寺（対雁41番地）

曹洞宗全久寺は、1906（明治39）年に曹洞宗中央寺当別説教所として対雁通に設置され、教化活動が始まった。1929（昭和4）年に現在地に本堂が完成し、1932（昭和7）年7月1日に寺号の認可を受け、「玉龍山 全久寺」と公称した。

1997（平成9）年12月9日、第三世詰應住職が66歳にて逝去。四世白井應隆住職が、2001（平成13）年8月30日から9月3日にわたり開創百周年慶讃法要および四世晋山結制、報恩大授戒会を、大本山永平寺貫首を迎えて執り行った。

應隆住職は、平成の大改修と銘打ち、寺院整備をさらに積極的に進めた。2000（平成12）年7月大庫院改修、2009（平成21）年6月不老閣増築納骨仮安置所新設、法輪閣改修及び南口玄関新設、翌年8月に新本堂、中門建立、参道を敷設している。



写真19 全久寺

一連の大がかりな寺院施設の大改修が終わった2010（平成22）年8月30日には、開創110周年記念本堂中門落慶慶讃大法要を執り行った。さらに2021（令和3）年8月28、29日に開創120周年、寺号公称90周年記念慶讃、再会結制法要を、大本山永平寺貫首を迎えて執り行った。

特筆すべき行事は、1月に「寒修行」がある。これは90年以上続く伝統行事で、大寒から御詠歌を唱えながら町内外を托鉢して歩く行である。毎年7月の「全久寺まつり」は地域の恒例イベントになっている。また寺院のホームページやSNSなどでの情報発信も積極的に行っている。

歴代住職 開山・橘成典、初代住職・白井絶山、二世・白井道功、三世・白井詰應、四世・白井應隆

じょうしょう

静正寺（高岡118番地1）

静正寺は1892（明治25）年に一字が結ばれ（建設され）、1895（明治28）年に真宗大谷派の説教場として開設されたことが始まりである。1913（大正2）年1月10日に寺号公称が認可され、静正寺となる。以降、本堂や施設の改修などは信者や地域住民の寄付などによって随時行われてきた。1970（昭和45）年以降は、1979（昭和54）年に須弥壇宮殿を新調し、同年8月に須弥壇宮殿造営慶讃法要、1981（昭和56）年には納骨堂を建設した。

1998（平成10）年に、帯広市大正町より磯石靖克が入寺し、翌々年の2000（平成12）年に住職となった。2016（平成28）年には庫裡が新築となった。



写真20 静正寺

定例行事は4月に永代経法要、11月に宗祖親鸞聖人報恩講（以前は8月末だったが令和元年より現行）、12月に秋初穂法要を執り行うほか、敷地内に建つ馬頭観音碑前にて、馬頭講を春彼岸に併せて行っている。

歴代住職 開基住職・松本法導、二世・松本力、三世・梅見貞一、四世・磯石靖克

皆得寺（東町96番地）

1899（明治32）年、青山川崎地区に創設された真宗大谷派の説教所に始まる。1908（明治41）年に大口皆應が龍泉寺（新潟県上越市大島）

より布教のため渡道し、大成寺に奉職。10年後の1917（大正6）年に大口師が青山説教所の在勤となる。翌年に地元住民の寄進により、寺院は青山中央へと移転。1947（昭和22）年に本山より寺号公称を得る。

1997（平成9）年9月、当別ダム建設により現在地（当別町東町、土地6406㎡）に移転することとなった。1999（平成11）年10月末に青山中央から東町への引っ越しが決まり、23日に青山の皆得寺本堂にて「お別れ法要」が営まれた。住職家族は一時、若葉町の倉庫に本尊、仏具と共に仮住まいし、2000（平成12）年5月東町の移転地で上棟式（建物、木造一部鉄筋造、約998㎡）が執り行われ、7月には移転を完了した。2001（平成13）年6月24日には「皆得寺落慶法要」が執り行われた。

2012（平成24）年9月、宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌により、音楽法要を厳修した。三世住職、大口直道は2007（平成19）年6月より、当別町仏教会の会長を務め、各派仏教寺院の協力の下、花祭り、毎年8月13日に万灯会法要等を行っている。

歴代住職 開基住職・大口皆應、二世・大口皆道、三世・大口直道



写真21 皆得寺

当別山専聖寺（太美南965番地）

専聖寺の前史は、1893（明治26）年に創立された「専教寺」にさかのぼる。初代住職の梅田覚了は1893年6月、福井県にある本山専照寺の命を受け、来道した。石狩生振村に「生振説教所」を開設し、生振、ピトエの住人が中心となり、住職の活動を支えた。1902（明治35）年に信徒の寄進により、当別村ピトエ13線南3号に約1000坪の土地を得て本堂等を建設し、2年後に真宗三門徒派「当別山 専教寺」と寺号公称した。その後、1948（昭和23）年に当別太16線南2号に移転した。

1975（昭和50）年12月、五代目に島義弘住職が就任。以降、施設の増設改修が続き、1978（昭和53）年納骨堂、1981（昭和56）年庫裡新築。1983（昭和58）年に寺院前用地を買収し、1988（昭和63）年に本堂用地1000㎡の寄付を受けた。1989（平成元）年には総代表より3000万円の寄付を受け、1991（平成3）年には「開基120年」、「寺



写真22 専聖寺

号公称90年」を記念し、本堂落成、慶讃法要式典が執り行われた。

1992（平成4）年、五代目島義弘の立案により、札幌の真宗高田派寺院から鐘楼堂を移転し、建立した。同年9月10日、六代目に島義慈住職が就任。

1995（平成7）年に臨時総会を開催し、三門徒派と被包括関係廃止を届出。その後、2002（平成14）年に浄土真宗東本願寺派寺院に転派し、2003（平成15）年1月21日に北海道庁より認証を受け、「専教寺」から「専聖寺」に寺号改称した。2020（令和2）年1月1日、七代目住職に島義昭が就任した。

歴代住職 初代・梅田覚了、二代・秀里大壽、三代・松井聖覚、四代・松井教正、五代・島義弘、六代・島義慈、七代・島義昭

専教寺（当別太1549番地1）

専教寺は、創立から2003（平成15）年1月12日までは専聖寺と歴史を共有するが、島義慈住職の代で転派し「専聖寺」と寺号改称したため、三門徒派を引き継ぐ一部檀徒が中心となり、専教寺として信仰が続けられていた。

孝勝寺（太美町16番地）

孝勝寺は1994（平成6）年、夕張市から現在地に移転し建立したものである。創立は1922（大正11）年で、上川遵法（宮城県玉造郡岩出山町生まれ）が、本門法華宗法栄教会所を開設したのが始まりである。1947（昭和22）年2月7日に孝勝寺と寺号公称した。1985（昭和60）年に、炭鉱の閉山などで札幌市など他所へ移住した檀家の拠り所として別



写真23 孝勝寺

院建立を計画。札幌に出張所を置き、建設の準備が始まった。1988（昭和63）年10月、役員会にて別院建立を太美に選定し、手続きを開始した。

1990（平成2）年に当別町より農振法決定通知が下り、1992（平成4）年7月に札幌、8月に夕張にて檀信徒総会を開催し、経緯の説明を行った。1993（平成5）年2月に現在地に土地移転登記が完了し、各種手続きを終え、10月に本堂等の上棟式が執り行われた。1994（平成6）年1月に入仏式を執り行い、

孝勝寺別院を開創した。

2014（平成26）年に拠点を1カ所にまとめるため夕張本院を閉じ、当別別院を本院と改めた。現在は檀家のみならず檀家以外の住民にも門戸を開き、「お寺deコミュニケーション」としてセミナーや映画、カフェなどイベントを開催し、ホームページやSNSなどでも積極的に発信し仏教への理解を広げている。

歴代住職 開基住職・上川遵法（日法）、二世・上川遵憲、三世・上川憲悟、四世・上川日遵

玉泉寺（太美町1480番地）

1907（明治40）年に玉泉寺と寺号公称し、石狩生振村にて布教活動が始まった。1947（昭和22）年に現在地に移転以降、本堂などの施設の改修を重ね、1972（昭和47）年納骨堂13坪、1979（昭和54）年、庫裡改修および増築（10坪）、1980（昭和55）年には本堂を鉄筋コンクリート製で63坪増築したほか、集会所、台所、便所、廊下および玄関など（30坪）も新築した。さらに1982（昭和57）年、本堂欄間12枚を設置している。

歴代住職 初代・玉井義雄、二代・六車諦弘、三代・宮浦俊道、四代・宮浦俊英、五代・宮浦祐明

松雲寺（太美町1497番地）

1892（明治25）年、獅子内番外地に浄土真宗本願寺派説教所が開かれたのが始まりである。1955（昭和30）年に本堂および庫裡を家曳きして、獅子内より太美の現在地へと移設した。

1984（昭和59）年に三代目竹澤一深住職が就任。1991（平成3）年には開教百年記念法要、2012（平成24）年には



写真24 玉泉寺



写真25 松雲寺

開教百二十周年記念法要を執り行った。

2017（平成29）年に、石狩市厚田区の本照寺住職が体調を崩し、竹澤一深住職が後継として請われたため、6月に竹澤信也住職が松雲寺第四代住職に着任した。

本堂など施設の変遷は、1973（昭和48）年8月に鐘楼堂設置、1980（昭和55）年1月に本堂増改築、1983（昭和58）年6月稚児・交通殉難者追悼碑建立、1988（昭和63）年庫裡・厨房、1998（平成10）年納骨堂建設、2014（平成26）年庫裡修繕と、継続的に整備が続けられている。なお2018（平成30）年9月の北海道胆振東部地震の際には、本堂の床や柱などが傾き、会館の本尊も倒れたことから、随所に補修修繕を施した。

歴代住職 初代・竹澤玄造、二代・竹澤洪信、三代・竹澤一深、四代・竹澤信也

超願寺（中小屋153番地）

1900（明治33）年に西本願寺派北海道別院により中小屋説教所の認可を得たのが始まりである。1950（昭和25）年に寺号公称し、超願寺と命名した。

1993（平成5）年9月22日に中島住職が逝去すると、苫前郡初山別村の信楽寺住職で、中島住職の義弟にあたる吉川昭恵が代務者として着任した。その後、門徒育成に力を注いでいたが、2010（平成22）年から2012（平成24）年にかけて豪雪によって本堂老朽化のため屋根の陥没、天井や軒先の崩落など施設の破損が相次いだ。そこで門徒総会を開催し協議した結果、全員一致で解散手続きを行うことを決定した。2020（令和2）年10月6日、超願寺の解散が認証され、120年の歴史の幕を閉じた。

仏教会

当別町には、仏教の宗派を超えた独自の連合組織の歴史がある。創設の経緯については、『当別町史』に詳しいので、本項では概略のみ紹介する。

同会の特筆すべき活動に、「埋れ火の塔」の建設がある。これは、1970（昭和45）年に迎えた当別開基100年の節目に、開拓の途上で犠牲になった無名の人々を顕彰するためのもので、当別神社敷地内に建立された。

製作者は、さっぽろ羊ヶ丘展望台にある「坂の上のクラーク」像の作者として知られる坂垣道氏である。石碑は中央に開拓者たちの姿が彫刻されており、著名な同氏の作品であることから、町外からも見学者が訪れる。塔の前にて毎年8月13日に、全久寺住職を導師に、仏教会の会員が参加して万灯会法要を行っている。

1979（昭和54）年に一部補修が行われたが、その後も塔全体に損傷が見られ土台も露呈し危険な状態となったため、

2005（平成17）年に当別町仏教会全13寺（当時）や篤志者からの寄進を受け、約320万円の予算でデザインを一新して再建立され、同年8月20日に「埋れ火之塔改修 完成落慶法要」が執り行われた。なおこの時に寄進した寺院は、大成寺、全久寺、勝圓寺、松雲寺、観蓮寺、玉泉寺、皆得寺、文教寺、日顕寺、静正寺、専教寺、専聖寺、超願寺である（順不同）。

2018（平成30）年11月11日には、仏教会創立50周年を記念したイベント「いのちの集い」を開催。追悼法要に続き、僧侶や寺族による『いのちをいただく』の朗読劇が披露されている。2022（令和4）年時点での会員寺社は、以下の12カ寺である。大成寺、全久寺、勝圓寺、松雲寺、観蓮寺、玉泉寺、皆得寺、文教寺、日顕寺、静正寺、専教寺、専聖寺（順不同）。2007（平成19）年より、皆得寺の大口直道住職が会長を務めている。



写真26 仏教会「埋れ火の塔」

（3）天理教

天理教當別分教会（六軒町78番地3）

当別町における天理教教会の設立は、「天理教當別分教会」に始まる。1924（大正13）年には「當別支教会」と改称。1941（昭和16）年に「天理教當別分教会」と改め、現在に至っている。

1978（昭和53）年11月17日には神殿を落成し奉告祭を執り行った。しかし、1986（昭和61）年12月21日に教職舎より出火し、新神殿を残し旧神殿と教職舎を全焼する災難に見舞われた。焼失した教職舎は2年



写真27 天理教當別分教会

後の1988（昭和63）年5月から再建工事が行われ、10月に新築された。2012（平成24）年7月から9月、神殿ならびに教職舎の屋根と外壁改修工事が行われた。

当教会は、地域とも関わりが強く、1946（昭和21）年に発疹チフスおよび天然痘が流行した際には、神殿を臨時隔離病舎として患者の世話にあたり、青年団の会合などにも神殿参拝場などを開放してきた歴史がある。また天理教が掲げ

る「地域のたすけ道場」の精神のもと、有珠山噴火や東日本大震災、大雪災害などでも積極的にボランティア活動に人材を派遣している。

歴代会長 初代・戸井嘉七、二代・山田喜一郎、三代・山田道信、四代・山田みどり、五代・山田義彦、六代・山田道弘

天理教豊隆分教会（西町11番地5）

1916（大正5）年に獅子内で集談所を設けたのが始まりである。

1925（大正14）年11月、伊藤朝治を所長として豊隆宣教所を設立する。

1979（昭和54）年7月、天理教本部の承認を得て現在地へ移転することとなり、翌年11月末に新たな建物が完成した。1992（平成4）年8月には駐車場不足解消のため境内地を拡張した（西町11番地6）。

歴代会長 初代・伊藤朝治、二代・伊藤正治

天理教太美分教会（太美町1695番地27）

1902（明治35）年に太美集談所を開所したことに始まる。1941（昭和16）年4月に「太美分教会」となり、初代会長に堤芳雄が就いた。

1955（昭和30）年に、現在地に神殿及び附属建物が竣工し、10月13日に落成奉告祭を執り行った。1989（平成元）年4月2日には二代会長の息子である堤文雄が三代会長に就任し奉告祭を執行し、現在に至っている。

歴代会長 初代・堤芳雄、二代・堤春雄、三代・堤文雄

天理教北石分教会（対雁43番地3）

1903（明治36）年、対雁通番外地（現・対雁43番地）にて教会を設立。1914（大正3）年厚田村（現・石狩市厚田区厚田）の部属教会として厚田分教会を設立し、現在に至る。

歴代会長 初代・木下キミ、二代・新庄為友、三代・木下光治、四代・西村キヨ、五代・西村誠道、六代・西村誠一郎

天理教龍陽分教会・ほっとハウス（太美町1467番地31）

1965（昭和40）年に札幌市西区八軒1条東1丁目9番地19にて教会設立。2011（平成23）年に火災に見舞われたことから、翌2012（平成24）年に現在地に移転した。

地域に根ざした活動を行っており、会長自ら町内会役員や民生委員などを務め、東日本大震災支援隊として10年間にわたりボランティア隊延べ78名を派遣し、支援物資の送付など180名が携わった。その後、2016（平成28）年の熊本地震の際にも支援活動を行った。現在、町内会を中心に「たすけ愛運動」を推進している。2017（平成29）年9月には北海道社会貢献賞を受賞。

歴史会長 初代・長尾ワカ、二代・西垣ことゑ、三代・渡辺誠

天理教新城富分教会

旧樺太豊原市の樺豊分教会が、戦後に当別町字西小川通59番地（当時）に移転し、「天理教新城富分教会」が開かれた。1995（平成7）年9月26日、後継者不在のため、秋田県所在の天理教会へ移転した。

（4）キリスト教系

当別キリスト福音教会（北栄町5番地1）

当別町にプロテスタント系の日本福音キリスト教会連合の伝道所が置かれるきっかけとなったのは、1970（昭和45）年に江別市野幌の「二番通福音教会」（現・三番通福音キリスト教会）の清水寛牧師が、当別で19名の参加者とともに「キリスト福音の集い」を開催したことであった。以来、信者宅で毎週日曜に礼拝が行われていたが、1974（昭和49）年に土地を購入、伝道所の設置を進めることとなった。1975（昭和50）年12月、清水牧師が逝去するも、1976（昭和51）年6月には、現



写真28 当別キリスト福音教会

在地にて当別キリスト福音教会の定礎式が行われた。この年の7月11日に中村徹牧師が就任。8月29日に教会堂が完成し、献堂式を執り行った。

1979（昭和54）年に教会隣接地83坪を購入。1990（平成2）年に教会堂隣接地（約80坪）を購入。同年12月19日には、クリスマス慰問として町立老人ホーム「長寿園」を訪問し、映画上映などを行った。以来、長寿園への慰問は1998

（平成10）年まで毎年行われた。

1992（平成4）年に会堂改修。1996（平成8）年には、「北海道レーナ・マリアコンサートin当別」の実行委員会（会長は辻野修レクサンド都市交流協会会長）の事務局を当教会メンバーが担った。コンサートは11月2日に当別町総合体育館で開催され、1600名の聴衆が集まった。レーナ・マリア氏は、両上下肢に重度障害を持ちながら世界的に活動するスウェーデン人のゴスペル歌手である。

（5）その他の神仏系施設

水天宮

当別町において現在、代表的な水天宮は二社あり、一つが「当別水天宮」（弥生53番地96）である。もともと1963（昭和38）年の青山ダムの完成に併せ「青山ダム水天宮」として青山に奉祀されていたが、遠隔地であり地域住民が参拝することが困難であったため、当別土地改良区設立50周年と新事務所の完成を機に、2001（平成13）年12月に社殿を造営し、祭祀した。

もう一社は、篠津中央土地改良区（金沢1363番地21）敷地内にある。1994（平成6）年に同地に事務所が建設されたのち、2003（平成15）～2004（平成16）年ころに理事会の発議で、周辺地域の5カ所の揚水機場に祀っていた水天宮をひとつにし、敷地内に社を造営し祭祀した。さらに同敷地内には川南地区にあった水神のほか狛犬、手水も移設している。また敷地内に「楊排万穂」の石碑も立つ。



写真29 水天宮（当別土地改良区内）



写真30 水天宮（篠津中央土地改良区内）

宅地の沢観音堂（中小屋2851番地）

『なかご屋 中小屋部落開基100年記念誌』によると、明治期、現地周辺で不慮の事故や不運な出来事が続いた際、観世音菩薩の姿をした石塊が発見され、これを本尊として観音堂が建立された。当地で亡くなった住人の慰霊とともに、国道275号の建設に使役され、犠牲となった囚人たちの霊を弔う意味もあったという。なお御堂境内は、建立以来歴代敷地所有者が無償で提供する慣行になっている。毎年9月17日に月形町の北漸寺住職が主宰し、祭礼が執り行われているという。

弘法大師堂

当別町内には弘法大師堂は2カ所ある。一つは石狩国第34番札所で、『当別太のあゆみ 開基90周年記念誌』には、弘法大師像の来歴について地元の故倉田弥三郎の手記として記述がある。同誌によると、大師像は1898（明治31）年に札幌に住む石工が刻んだもので、信仰に厚かった松永秀次郎ら3名が、「わらじばきで札幌から交替しながら背負って」集落に持ち帰ったという。安置場所は個人宅の縁側から始まり、数度の移転ののち、現在は、当別太16線南2号に小型の家が作られ、安置されている。



写真31 弘法大師堂（当別太16線南2号）



写真32 弘法大師堂（ビトエ地区）

もう一つは、ビトエ地区（13線南4号角地）にあり、『風雪百年 ビトエ開拓百年誌』によれば、当初、玉泉寺の住職や篤志者の寄附によって、御堂を専教寺（旧）境内に祭祀したとある。1948（昭和23）年に専教寺が移転することになったため、個人宅の倉庫に安置された。しかし、経年劣化で堂の老朽化が著しく、1977（昭和52）年に集落民らによってブロック造の堂が現在地に新築され、大師像を安置した。

そばには「美登江部落開拓百年記念碑」「太美尋常高等小学校発祥の地碑」「牛馬頭観世音」が立つ。

（6）地神・馬頭観音・地藏

地神碑

農業を中心に発展してきた当別町には、土地の所有者が五穀豊穡を祈願して建てた、天照大神ほか4神がきざまれた五角柱の地神碑が多く存在する。2022（令和4）年の時点で、町内（青山地区を除く）には地神が多数点在していた。これらは、あくまで公道沿いから目視できたものの、あるいは寺社敷地内などに設置されているもので、このほかに私有地内にある場合や、倒壊や撤去されたものなどもあるはずだが実態は不明である。

梅原達治元札幌大学教授の「地神信仰の地域的変異について」（『札幌大学教養部紀要 第30号』）によると、「北海道に『地神さん』と呼ばれる習俗がある。これは明治以降、他府県から移住した人々が、故郷の文化の一要素として開拓地にもちこみ定着させるとともに、地神習俗を知らなかった近隣の開拓民のなかにも伝播していたものと考えられる」という。町内の数多の地神碑についても、このように伝播し、その数を増やしていった可能性がある。

馬頭観音碑

馬の保護神として広く信仰されてきた馬頭観音（馬頭観世音、馬頭観世音菩薩）碑は、農耕作業や運搬などにおいて馬（牛）が欠かせない家畜であったことから、馬の慰霊、および農耕の守り神、馬の守り神として建立されたものである。「北海道馬頭観音研究会」の2015（平成27）年の調査によれば、道内ではおよそ3400基が確認されている。当別町に初めて馬が導入されたのは、1874（明治7）年のことで、伊達市に入

植した伊達邦成（邦直の実弟）から7頭が寄贈されたという。

公道沿いや神社内で確認できる馬頭観音（馬魂碑）は、当別町内に多数あり、加えて「牛馬頭観音」、また「獣魂碑」や「緬羊之霊」といった石碑もある。石碑の形状は、文字のみ刻まれたものや、馬の姿や馬頭観音菩薩像が浮き彫りになったものなど多様である。

地蔵尊

地神碑や馬頭観音に混じって、路傍で見られるのが地蔵尊である。2022（令和4）年現在、町内に5体が確認できた。そのうちの3体は、「坂の下地蔵」「黒川地蔵尊」「延命地蔵尊」と地元では呼ばれており、いずれも現地で起きた不慮の事故や災害などで犠牲となった人々の慰霊碑として建てられた。



地神（材木澤神社内）



地神（当別若葉）



地神（茂平沢神社跡地）



地神（東裏神社内）



地神（獅子内神社内）



地神（蔵岱2315番地付近）



地神（川下神社内）



地神と馬頭観音（当別太1887番地96）



地神（西当別神社内）



地神（川下2858番地付近）



地神（当別太農事組合会館敷地内、
右は屯田用地開拓記念碑）



地神（高岡神社内）



地神（ビトエ東部会館横）



地神（太美町1502番地付近、水路竣工記念碑そば）



地神（弁華別神社）



岸山馬頭観音（当別太1552番地付近）



馬頭観音（獅子内1939番地付近）



馬頭観音（高岡の静正寺内）



馬頭観音、緬羊、観音3基（蔵岱2317番地付近）



馬頭観音（獅子内神社内）



馬頭観音（消防第3分団近く）



牛馬頭観音（川下神社内）



馬頭観音（当別太1519番地付近）



馬頭観音（左）と牛馬観世音（右）（東裏神社内）



馬魂碑（阿蘇公園内）



馬頭観音（蔵岱 国道275そば）



馬頭観音（川下756番地付近の農地角）



牛馬頭観音（ビトエの弘法大師堂そば）



獣魂碑（上当別2482番地 JA北いしかり花卉共選場そば）



馬頭観音碑（川下・下川沼付近）



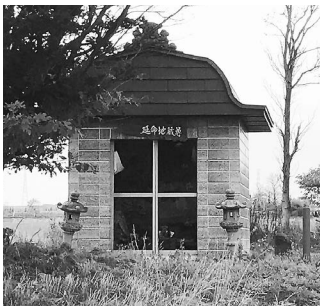
馬頭観音（弁華別神社内）



坂の下地藏（獣魂碑付近）



黒川地藏（茂平沢、当別川沿い）



延命地藏尊（蕨岱2317番地付近）



地藏（金澤神社付近）



地藏尊（東裏146番地付近）

〈引用・参考文献〉

- 『北海道神社庁誌』（北海道神社庁、1999年）
梅原達治「北海道の相馬神社 北海道の神社の人類学的研究（二）」『札幌大学教養部・札幌大学女子短期大学部紀要 4巻』（1972年）
梅原達治「地神信仰の地域的変異について」『札幌大学教養部紀要 第30号』（1987年）
『川郷 川下開基百年記念誌』（1987年）
『開拓90年の歩み 獅子内』（1983年）
『ふるさと 青山中央自治会解散記念誌』（2000年）
『百年の歩み 中央部落史』（1978年）
『なかご屋 中小屋部落開基100年記念誌』（1986年）
『当別太のあゆみ 開基90周年記念誌』（1982年）
『風雪百年 ビトエ開拓百年誌』（1983年）